

『正法眼藏』『法華転法華』と論義

——特に「開示悟入」をめぐる——

石 島 尚 雄

はじめに

「開示悟入」という仏教用語のルーツを辿って行くと、『法華經』『方便品』に行き当たると。

諸仏世尊、欲^レ令^下衆生、開^レ仏知見^一、使^上得^レ清淨^一、故出^二現於世^一。欲^レ示^二衆生、仏之知見^一、故出^二現世^一。欲^レ令^二衆生、悟^二仏知見^一、故出^二現世^一。欲^レ令^二衆生、入^二仏知見道^一、故出^二現世^一。(T、九、七上)

とあるのがそれである。しかし、この箇所を引用する際、後世では、省略形で引用されることが多い。「為令衆生、開示悟入、仏之知見」然り、「咸令衆生、開示悟入、仏之知見」然りである。私は、従来、道元禪師(二二〇〇—一二五三)(以下道元と略称)の「欲令衆生、開示悟入」という引用は、「方便品」の省略形とばかり思っていたが、「論義」を見てその考えが変化した。そして、今回は、この省略の仕方のパターンを分析することを通して、道元がもとにした典故を比定した

いと思う。⁽¹⁾

一、「開示悟入」と「論義」

「論義」の中で「開示悟入」について詳論を展開しているのは、文字どおり「開示悟入」の巻である。その撰述趣旨を探れば、「開示悟入」せる仏知見は、因位の知見のみに限定せず、当然のことながら妙覚極果をも「開示悟入」する為に諸仏世尊は出世したのだ、という主張に尽きる。それはそうであらう。たとえ教化せられる衆生の方が未熟で、結果的に未悟に終わろうとも、妙覚極果を「開示悟入」せしめる為に出世したのだと考える方が筋が通っている。

しかしながら、私が問題にしたいのは、この点ではなく、經典の引用の仕方である。例えば、「開示悟入」の巻では、

答。經文云、為^レ令^下衆生、開^二示悟^三入^上、仏之知見^一。(『冠導台宗二百題』卷十五、一二四七頁、「台宗二百題」卷十五、三十九丁表)

と引用されているのであるが、『法華經』はこの様な省略形ではないことは既に述べた通りである。しかし、日本天台のみならず、中国天台もこれに関しては大同小異で、

為令衆生、開示悟入、仏之知見（『法華文句』T、三四、三八中など）

咸令衆生、開示悟入、仏之知見（『法華文句』T、三四、一一二上など）

とあるように、『法華經』の經文と違い、「開示悟入」という省略形で引用される形が定着している。また、『法華經』では「欲令衆生」となっているのに、引用形は、「為令衆生」とか「咸令衆生」という形に後人の手が加わり変化しているのがその特徴であるといえる。細かなことであるが、これらは看過できない事柄である。このことに留意して先に考察を進めよう。

二、「開示悟入」と『正法眼蔵』

それでは、具体的に『正法眼蔵』の原文に当たって考察しよう。「法華転法華」の巻に、

十方仏土中者法華の唯有なり。これに十方三世一切諸仏・阿耨多羅三藐三菩提衆は、転法華あり、法華転あり、これすなはち、本行菩薩道の不退不転なり、諸仏智慧甚深無量なり、難解難入の安詳三昧なり。あるいはこれ文殊師利仏として、大海仏土なる唯仏

与仏の如は相あり、あるいは、これ釈迦牟尼仏として、唯我知是相、十方仏亦然なる出現於此あり。これすなはち我及十方仏、乃能知是事と、欲令衆生開示悟入せしむる一時なり。（春秋社本『道元禪師全集』第二卷、四八七頁）

とある。この中で、「欲令衆生、開示悟入」の部分については先行業績である水野弥穂子氏も河村孝道氏も『法華經』「方便品」を指摘していて、道元が要約して「欲令衆生、開示悟入」としたような注釈をつけている。果たしてそうであろうか。私は別の見解を持っている。というのは、『論義』の「開示悟入」の巻を見る限り、道元の出生以前に、既に省略形の「為令衆生、開示悟入、仏之知見」の形が『法華經』からの引用であるとして、中国天台でも日本天台でも広く流布していた事実があるからである。従って、「欲令衆生、開示悟入」という省略形は道元が鎌倉時代になつてはじめて提出したものではないといえる。しからば、中国天台や日本天台がそのルーツかという点、『台宗二百題』や『法華文句』等の天台三大部を見る限り、「欲令衆生、開示悟入」の「欲令衆生」の部分全然一致していないのである³。そこでこの問題の手懸かりを探して、「法華転法華」を読み進むと、

・・・方便品にいたりて、粗いはく、とどまるべし、この経はもとより因縁出世を宗旨とせり、たとひおほくの譬論をとくも、これよりこゆることなし。何者因縁といふに、唯一大事なり。唯一

大事は即仏知見なり、開示悟入なり。おのづからこれ仏之知見なり、已具知見、彼既是仏なり。なんぢいままきに信すべし、仏知見者只汝自心なり。かさねてしめす偈にいはいく、心迷法華転、心悟転法華、誦久不レ明レ己、与レ義作二讐家一、無念念即正、有念念成レ邪、有無俱不レ計、長御二白牛車一。……経文、あきらかになんぢにむかひていふ、無二亦無三と。なんぢいかさがさとらざる。三車はこれ仮なり、昔時なるがゆえに、一乗はこれ実なり。……法達すでに啓発をかうぶりて、踊躍歡喜して、偈を呈し賛じていはく、経誦三千部、曹溪一句亡、未レ明二出世旨一、寧歇二累生狂一。羊鹿牛權設、初中後善揭、誰知火宅内、元是法中王。この偈を呈するに、祖はいく、なんぢいまよりは念経偈となづけつべし。(春秋社本『道元禪師全集』第二卷、四八九—四九一頁)

とある。この箇所は『伝灯録』卷五からの引用であることが既に知られている。⁽⁴⁾しからば、「欲令衆生、開示悟入」に關していえば、何も教家の「論義」や「三大部」のみの専売特許とはいえないのである。しかも、慧能(六三八—七二三)という同じ禪家でもかなり上古の祖師が、『法華經』『方便品』を拈提しているのである。そこで禪家の「方便品」の拈提を調べてみると、果たして、長水子璿(九六四—一〇三八)の『首楞嚴義疏注經』一之一に、

若原二仏本意一、唯為二一大事因緣一。欲レ令衆生、開二示悟入、仏之知見一。雖二三車通許一、唯賜二白牛一。但為二一乘無二三及二二

『正法眼藏』『法華転法華』と論義(石 島)

也。(『首楞嚴義疏注經』一之一〔首楞注經卷一上、一丁裏〕、T、三九、八二三下参照)

とある。如何であらうか。ここには「欲令衆生、開示悟入」とあるのである。⁽⁵⁾道元は子璿のことを教禪一致説をとなえるものとして夙に批判しているの⁽⁶⁾であるが、子璿が撰述した『首楞嚴義疏注經』を成立史的には読めるにしても、問題は道元が果たしてそれを読んだかどうかである。そのことを確かめる為に、道元の『正法眼藏』を精査してみた。果たして、『転法輪』の巻に、次の様にあつた。すなわち、

一人発レ真歸レ源、十方虚空、悉皆消殞は、首楞嚴經のなかの道なり。この句、かつて數位の仏祖、おなじく拈レしたたり。いまよりこの句、まことに仏祖骨髓なり、仏祖眼睛なり。しかいふところは、首楞嚴經一部拾軸、あるいはこれを偽經といふ、あるいは偽經にあらずといふ、両説すでに往古よりいまにいたれり。旧訳あり、新訳ありといへども、疑著するところ、神龍年中の訳をうたがふなり。しかあれども、いますでに五祖の演和尚・仏性泰和尚・先師天童古仏、ともにこの句を拈レしたたり。ゆえにこの句、すでに仏祖の法輪に転レぜられたり、仏祖法輪転なり。このゆえに、この句、すでに仏祖を転レじ、この句、すでに仏祖をとく。仏祖に転レぜられ、仏祖を転レずるがゆえに、たとひ偽經なりとも、仏祖もし転レ拈レしたたらば、真箇の仏經、祖經なり、親曾の仏祖法輪なり。(春秋社本『道元禪師全集』第二卷、一八三頁)

とある。しからば、道元自身偽經として批判している『首楞

『厳経』をも、「たとひ偽経なりとも、仏祖、もし転挙しきたらば、真箇の仏経・祖経なり」と述べて研究しているのであるから、『首楞厳経』の注釈書として最も有名な子璿の『首楞厳義疏注経』の事を知らないなどという事があり得るだろうか。つまり、道元はおそらく『首楞厳義疏注経』を読んだに違いないのである。子璿の『首楞厳義疏注経』が成立史的に問題がない以上、道元の『正法眼蔵』の引用典拠たり得るからである。

以上のことから、私は、『正法眼蔵』『法華転法華』の「欲令衆生、開示悟入せしむる一時なり」の引用典拠は、『首楞厳義疏注経』一之二（一、三九、八三下）であると比定したい。

おわりに

今回、『正法眼蔵』『法華転法華』と論義」と題して、「論義」との関連性ありとの作業仮説を立てて調べてきたのであるが、その作業仮説が実は誤っていたことが判明した。しかし、誤った作業仮説のお陰で、「論義」をはじめ「天台典籍」では、既に「開示悟入、仏之知見」という省略形で『法華経』「方便品」が引用されている歴史的事実を知ることができた。また、ある時は「為令衆生・・・」、さらにある時は「咸令衆生・・・」の形であることも知ることができた。つまり、道

元のこの「欲令衆生、開示悟入」の引用が、「天台典籍」の系統ではないという確信を持つことができた。このことは、日本天台の「論義」、中国天台の「三大部」の両方を調べて初めて得られたものである。今思うに、正に怪我の功名だったのである。

さて、顧みて道元の『正法眼蔵』『法華転法華』の撰述意図を探ると、

又、この経によりて、上人の法をうるものあれども、いま、われらが高祖曹溪古仏のごとく、法華転の宗旨えたるなし、転法華の宗旨、つかふあらず。いま、これをきき、いま、これにあふ、古仏の古仏にあふにあへり、古仏土にあらざらんや。よろこぶべし、・・・（春秋社本『道元禅師全集』第二巻、四九六頁）

と述べていることに尽きると思う。つまり、『伝灯録』巻五にもとづく慧能と法達のお話における慧能の「心迷法華転、心悟転法華、・・・有無俱不計、長御白牛車」という偈を布衍する為に撰述されたのである。このことを踏まえれば、当然、禅家における『法華経』の拈提がクローズアップされてくるのである。そこで見出されたのが、『首楞厳義疏注経』であろう。また、そこで、述べられた「欲令衆生、開示悟入、仏之知見」という用語は、見事なまでの『法華経』の省略形による引用である。この様に、道元以前に既に『法華経』の省略形による引用が多く為されている事実を踏まえれば、「法

華転法華」の巻の「欲令衆生、開示悟入」は道元によって初めて省略化されたものではない、と言わざるを得ない。そして、「転法輪」の巻の道元の語を踏まえれば、道元は、『首楞嚴義疏注経』から「欲令衆生、開示悟入」の語を引用したと推定される。

ところが一方、「論議」では、「答。経文云、為^レ令^四衆生、開^三示悟^三入、仏之知見」。即是為^レ令^四衆生、開^三示悟^三入、妙覺極果。豈但局^二因位^一耶（『冠導台宗二百題』卷十五、一二四七頁、「台宗二百題」卷十五、三十九丁表）とあるように、その撰述意図は、因位に限定せず、妙覺極果を開示悟入するのだということを主張するにある。従つて、実際の修証を問題にするよりも、教理学的な正邪を峻別することにその主眼があるのである。

この様に、道元は『法華経』『方便品』を拈提して「心悟転^三法華^三、……長御^二白牛車^一」といい、修証のことを主題にするのに対して、「論議」では、同じ「方便品」を拈提して、教理学的正邪を峻別することを主題にしているという差異のあることが明らかになったのである。

1 私が最初にこの問題に逢着したのは、「曹洞宗総合研究センター宗学研究部門」における道元禪師の出典研究のゼミにおいてであった。その時、筆者が提出したペーパーは、次の様であ

『正法眼蔵』『法華転法華』と論議（石 島）

る。すなわち、

二、正法眼蔵・法華転法華 欲令衆生

B『法華経』方便品

〔引用〕

欲令衆生、開示悟入（春秋社本『道元禪師全集』第二巻、四八七頁）

〔出典〕

欲令衆生、開仏知見、使得清淨、故出現於世。欲示衆生、仏之知見、故出現世。欲令衆生、悟仏知見、故出現世。欲令衆生、入仏知見道、故出現世。（法華経、方便品、T、九、七上、国訳―法華部、四一頁）

〔引用の書き下し〕

衆生をして開示悟入せしめんとす

〔備考〕

欲令衆生、開示悟入（長水子璣、首楞嚴義疏注経一之一、

T、三九、八二三下）

欲令衆生、開示悟入（宗密、大方広円覚修多羅了義経略疏上二、T、三九、五三九中）

である。しかし、この当時、「論議」の「開示悟入」の巻のことを知らなかった。よつて、文字上は一致していたものの、道元が批判していた長水子璣の著述であったことから出典としての表示を見送った経緯がある。

2 水野弥穗子氏は、岩波文庫本『正法眼蔵』（二）の四八三頁補注にて、『法華経』『方便品』を出して、その省略形であることを示唆している。また、河村孝道氏は『道元禪師全集』第二巻四八八頁で、「……欲令衆生、開示悟入は方便品」と頭注

をつけている。

- 3 例えば、『法華文句』に、「欲令衆生咸得聞知者。即聞思両慧亦信法両行。収無量帰一。改三乗教理。六番破無明等。諸仏道同開示悟入仏之知見。故言一切世間難信之法也。」（T、三四、三三）とあるので、これを第一出典とするにはやや無理がある。

- 4 『景德伝灯録』巻五に、「……至方便品、祖曰、……何者因縁、唯一大事。一大事即、仏知見、……開示悟入、自是仏之知見、……彼既是仏、已具知見、……偈曰、心迷法華転、心悟転法華、誦久不明己、与義作讐家、無念念即正、有念念成邪、有無俱不計、長御白牛車、……經文明向汝道、無二亦無三、汝何不省、……贊曰経誦三千部、曹溪一句亡、未明出世旨、寧歇累生狂。羊鹿牛權設、初中後善掲、誰知火宅内、元是法中王。祖曰、汝今後方可名、為念経僧也。」（T、五一、二三八上—中）とある。尚、鏡島元隆監修、曹洞宗宗学研究所編、『道元引用語録の研究』一六七—一七一頁参照。

- 5 この他に、宗密の「大方広円覚修多羅了義経略疏上二」にも、「此同法華、欲令衆生、開示悟入」（T、三九、五三九中）とある。

- 6 鏡島元隆、『道元禅師と引用経典・語録の研究』一四三—一四四頁に、「……前章で明らかにしたように、円覚経は経禅一致を唱えた圭峰宗密の所依の教典であり、首楞嚴経は同じく教禅一致を説いた長水子璿の所依の教典である。然るに、前に挙げた永平広録の文には、「時の人。楞嚴・円覚の教典を以て多く禅門所依と謂へり。師常に之を嫌ふ」の割註が見えるように、元来、教禅一致家の所依の教典であつたこの二経が、宋代にいたつては禅家の所依の教典と見なされるまでにいたつたの

である。このことは、宋朝禅においては、教外別伝が大いに唱えられた反面、宋朝禅の一方の底流には教禅一致を唱える風潮も存したことを示すものである。これは、教禅対立以前の至純至高な仏法に立脚する道元禅師にとつては、とうてい容認し得ないものであつた。従つて、道元禅師が首楞嚴経・円覚経を排遣したことは、二経によつて代弁された教禅一致説を排遣したものと見られるのである。」とある。

（キーワード） 正法眼藏法華転法華、台宗二百題、開示悟入、法華経方便品、首楞嚴義疏注経

（曹洞宗総合研究センター宗学研究部門特別研究員）

41. The Lotus Sutra and Dōgen

Eryū KAWAGUCHI

42. *Shōbōgenzō hokketenhokke* and *Rongi*

Takao ISHIJIMA

In the “*Shōbōgenzō hokketenhokke*” (正法眼藏, 法華転法華) we find the expression “*yokuryō shujō kai ji go nyū*” (欲令衆生, 開示悟入). It has been thought that Dōgen (道元) quotes this expression from the “*Hokekyō hōben-bon*” (法華經方便品). However, I wondered about this, and investigated a number of sources. As a result, I believe that Dōgen (道元) quoted this expression from the *Shoulengyan yishuzhu jing* (首楞嚴義疏注經) of Zixuan (子璿).

43. Nichiren Shōnin's Propagation of the *Lotus Sutra* through his Writings

Gyōkai SEKIDO

Nichiren's attitude was to vigorously promote his ideas. Focusing on engaging in as much communication as he could with his followers, he was a prolific letter writer, thus producing a great volume of writings. A collection of about 280 of his authenticated works are contained in the volume *The Complete Works of Nichiren Shōnin*, co-authored by Dr. Hoyo Watanabe and Dr. Hosho Komatsu. This volume is upheld as the standard for present-day research on Nichiren Shōnin. There are about 260 works in the collection that are classified as letters, although some of these are quite lengthy and could be considered as treatises or theses. My purpose for this presentation is to try to classify these letters by purpose and subject.

44. On the Disclosure of the Core Transmission Teachings of the Taiseki-ji School Found in Nichikan's Writings

Mikio MATSUOKA